

## 【日本臨床腫瘍学会】



公益社団法人日本臨床腫瘍学会理事長  
国立がん研究センター中央病院副院長兼  
呼吸器内科長 医学博士

大江裕一郎さん

おおよそ・ゆういちろう / 1984年東京慈恵会医科大学卒業、同大学付属病院、国立がんセンター病院を経て92年マイアミ大学留学。帰国後2001年国立がんセンター中央病院第1領域外来部通院治療センター医長、09年国立がんセンター東病院通院治療部長、10年同病院呼吸器腫瘍科呼吸器内科長、11年同病院副院長などを経て14年から現職。

がん診療のレベルアップを推進し、国民の福祉に寄与するために

# がん薬物療法専門医を 育成し制度として確立

### 治療薬の進化に伴い 腫瘍内科学の確立へ

日本臨床腫瘍学会が誕生したのは2002年。がんの薬物療法を研究するために医師・研究者が集まり発足させた日本臨床腫瘍研究会を前身として設立されました。

学会に発展した背景には、がん治療を取り巻く情勢の大きな変化があります。かつて日本では、がん治療といえば臓器ごとの外科的な処置が中心で、薬物治療はその延長として位置づけられていました。しかし、分子標的薬などの抗がん剤や免疫療法など、治療法の急速な進歩と多様化により、腫瘍内科医による専門的な治療が求められるようになりました。外科や放射線科、他の内科などチーム医療における「治療の司令塔」としての腫瘍内科医の育成とともに、腫瘍内科学を学問として根付かせる必要が生じたのです。

学会が担う大きな目的のひとつに、がん薬物療法専門医の育成と認定が挙げられます。幅広い臓器のがん薬物療法の知識と技術を持ち、質の高いがん医療を実践する薬物療法専門医に認定されるには、研修と症例報告の基準に達したうえで筆記試験と面接に合格することが要件です。この4月に専門医認定者数は1233人に達する予定ですが、まだ十分な人数とは言えません。制度を確立し、全国に配備できるよう専門医を育成することが課題です。

学会では教育セミナーを年に2回実施しています。このセミナーは、医師以外に薬剤師や看護師も受講し、それぞれの知識をブラッシュアップさせるためにも役立っています。

また、がん研究の推進も重要なテーマです。質の高い臨床研究やトランスレーショナル・リサーチ（基礎研究の成果を新しい医療技術や医

薬品として臨床に応用するまでの一連の過程）を進めています。

### 内外の最新情報を提供し 適切な治療選択を実現

現在、書籍やインターネット上で見られるがん治療についての情報は玉石混交です。たとえば偏った食事の推奨や、「抗がん剤は苦しい副作用がある」と決めつけるなど誤った情報も溢れています。偏った食事で栄養バランスが崩れることは当然危険ですし、最近では吐き気止めなどの支持療法が進化して抗がん剤の副作用も軽くなっています。科学的な根拠に基づく情報かどうかを見極めることが大事です。

新しいがん治療では「免疫チキックポイント阻害剤」と呼ばれる免疫療法が注目されています。厳格な施設要件、医師要件のもと供給先として認められた医療機関で使用されていますが、それ以外の不適切な使用には注意が必要です。また「免疫療法」と名の付くさまざまな治療が存在しますが、その信頼性の指針となるのは、大規模なランダム化臨床試験による有効性のデータが示されているかどうかです。昨年当学会が発行した『がん免疫療法ガイドライン』で、どういった種類のがんにどの免疫療法の薬が推奨されるかを示しています。

がんの治療について豊富な知識を持つ専門医の名簿は、学会のホームページで公開しています。専門医のいる病院を探したり、セカンドオピニオンを得たりといった場合に利用してほしいと思います。

(談)

# 社会と医療

時代とともに進化する

医師や研究者、医療従事者は、それぞれの領域で自発的に「学会」を形成している。医学に関する科学や技術の研究促進、情報の集約や社会への提言など、活動は多彩だ。そこには、質の高い医療を提供し、病気の治療や管理、予防に貢献するという目的がある。このシリーズでは、医療系の各学会が取り組む課題や先進的な活動を紹介する。第11回は日本臨床腫瘍学会理事長・大江裕一郎さんに話を聞いた。

### 日本臨床腫瘍学会ホームページ



学術集会やセミナー案内など会員向けの情報以外にも、一般の方が閲覧可能な県別のがん薬物療法専門医名簿を公開している。

<http://www.jsmo.or.jp/>